



Title	南琉球八重山黒島方言における形容詞のサブグループ ：接辞Kuが続く形式に注目して
Author(s)	原田, 走一郎
Citation	阪大日本語研究. 2014, 26, p. 71-85
Version Type	VoR
URL	<a href="https://doi.org/10.18910/50080">https://doi.org/10.18910/50080</a>
rights	
Note	

*The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA*

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

The University of Osaka

南琉球八重山黒島方言における形容詞のサブグループ

——接辞 *ku* が続く形式に注目して——

Subgroups of Adjective Class in Kuroshima Ryukyuan:

With special focus on the form with the suffix *ku*

原田 走一郎

HARADA Soichiro

キーワード：琉球語、黒島方言、形容詞、形態論

### 【要旨】

本稿では、南琉球八重山黒島方言の形容詞について、2つの形態的サブグループが認められる、ということを述べる。また、両グループの間のふるまいの違いは、*ku* という接辞をとった場合に顕著にあらわれるが、この時に限られているわけではない。複合や重複など、他の形態的操作を行う場合にも両グループ間のふるまいの違いが観察されるため、このサブグループを認めるることは黒島方言の記述にとって不可欠であると言える。なお、この2つのグループのふるまいの差は、接尾辞の分析可能性の差によるものであるということも指摘する。また、語数に偏りなどもないため、どちらかのグループが例外的である、ということもない。さらに、他の琉球語諸方言においても類似した現象が観察されることもあわせて指摘する。

### 1.はじめに

本稿では、南琉球八重山黒島方言（以下、黒島方言とする）における形容詞の形態的サブグループを記述することを目的とする<sup>1)</sup>。具体的には、同方言の形容詞は形態的に2つのサブグループに分類される、ということを述べる。この点は、先行研究において指摘されていない。

ここで、簡単に本稿で主に取り扱う現象を見ておく。一方のグループの形容詞は、*guffa*（「重い」）という語を例にとると、非過去・肯定で *guffa* というかたち（本稿では便宜的にこのかたちを基本形と呼ぶこととする）を持ち、これに *ku* という接辞を付す場合、*guffa-ku* となる。つまり、基本形に *ku* を足した格好である。これに対し、もう一方のグループの形容詞ではふるまいが異なる。基本形が *gumaha*（「小さい」）という語を例にとると、さきほ

どの*guffa*の例にしたがうとすれば、基本形にそのまま*ku*を足せばよかつたので、*gumaha-ku*となることが予想される。しかし、実際にはこうはならない。そのかわりに、*guma-ku*という形式が文法的とされる。つまり、簡単に表にすると以下の表1のようになる。(表に示すように、*guffa*（「重い」）に対する\**guf-ku*という形式なども非文法的である。)

表1 *guffa* と *gumaha* の接辞 *ku* に対するふるまいの違い

「重い」	「小さい」
<i>guffa</i>	<i>gumaha</i>
<i>guffa-ku</i> (* <i>guf-ku</i> )	<i>guma-ku</i> (* <i>gumaha-ku</i> )

このように、形容詞という1つの品詞のなかでも、形態的ふるまいに違いが見られる。特に、本稿では、この接辞 *ku* に対するふるまいに注目して記述を進める。しかし、のちに示すように、このサブグループは接辞 *ku* にまつわる現象の説明のためだけに必要なのではなく、他の現象（複合と重複）の説明にとっても有効なものである。したがって、このサブグループを設定することは黒島方言の記述にとって不可欠なことである。特に、このことは先行研究においてまったく指摘がなされていないため、本研究が黒島方言の記述に貢献することは間違いない。

さらに、接辞 *ku* に似た形式は琉球諸語に観察されるが（山田 1983 及び、本稿の第6節参照）、この形式をめぐる形容詞のふるまいを詳述した研究は、管見の限り、ない。したがって、本研究は今後のそれぞれの方言における記述や、方言間の対照研究の端緒となると思われる。この点についても、のちに述べる。

本稿の流れを述べる。まず、第2節において黒島方言の概要を簡単に示す。続く第3節では、本研究の先行研究を紹介し、問題点をまとめ。第4節は本稿の本論であり、*ku* という接辞が後接した場合のふるまいが2つのサブグループの間で異なることを示す。第5節では、このサブグループが他の現象の説明にも有効であることを示す。さらに第6節においては、他の琉球諸語における形容詞の接辞 *ku* をめぐるふるまいについて簡単に触れ、本稿の研究が今後の研究に資する可能性を示唆する。最後の第7節は本稿のまとめであり、あわせて今後の課題も述べる。

## 2. 黒島方言の概要

本節では黒島方言の概要を簡単に述べる。黒島方言は、沖縄県八重山郡竹富町黒島にお

いて使用されている。この島は、八重山地方の中心である石垣島から高速船で南西へ約 30 分行つたところにある、周囲 10km ほどの小さな島である（図 1 を参照のこと<sup>2)</sup>）。島内には、5 つの集落（保里、伊古、東筋、仲本、宮里）があるが、このうち、保里、東筋、仲本の 3 つのコミュニティでのみ伝統的な黒島方言が使用されている<sup>3)</sup>。なお、多少方言差があるようであるが、本稿においては特に区別せず、まとめて黒島方言として扱う。

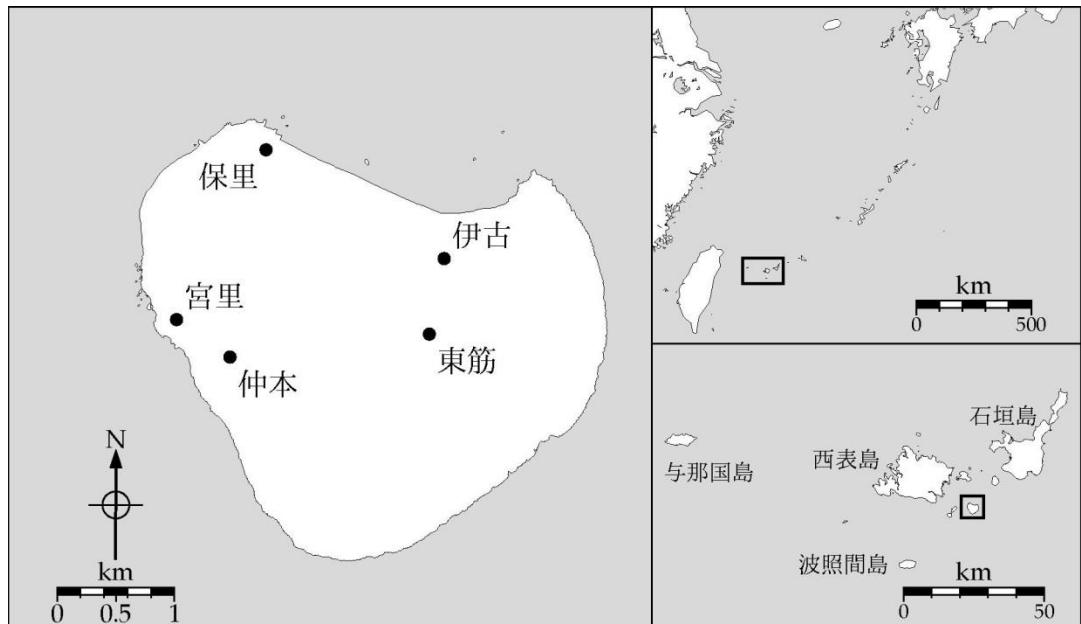


図 1 黒島の地理

系統としては、琉球諸語の南琉球語、さらにその下位区分である八重山方言群に属する。ただし、近隣の方言との相互理解はほぼないようである。八重山方言群の系統についてはローレンス（2000）に詳しい。

黒島方言は、ほぼ 75 歳以上の方のみがこれを用いる能力をもっている。2010 年の国勢調査によると、黒島の当時の 65 歳以上人口が 53 名であるため（沖縄県八重山支庁（2012）『八重山要覧』参照）、2013 年現在、40 名前後の話者がいるものと推測される。しかし、この話者の子供世代は理解能力はあるものの、使用能力は持たず、この方言の継承はなされていない。したがって、この方言は消滅の危機に直面している。

黒島方言の音素目録は以下のとおりである。15 の子音、2 つの半母音、5 つの母音を認める。なお、長母音は同じ母音の連続と見なす。音節構造は(C)(C)(S)V(V)(C)である。

表2 黒島方言の子音

		両唇	唇歯	歯茎	軟口蓋	声門
破裂音	無声		p	t	k	
	有声		b	d	g	
破擦音	無声			c		
	無声		f	s		h
摩擦音	有声		v	z		
	はじき音			r		
鼻音		m		n		

黒島方言の半母音 : j、w

表3 黒島方言の母音

	前舌	奥舌
狭	i	u
半狭	e	o
広	a	

### 3.先行研究

本節では、本稿の研究にかかわる範囲で黒島方言に関する先行研究のレビューを行う。黒島方言に関する先行研究はそもそも少ない。しかし、そのなかで、山口（2004）と平山他（1967）は黒島方言の形容詞に関する記述を行った重要な先行研究である。以下、それぞれまとめる。

まず、山口（2004: 69-73）では、20ほどの形容詞の活用を示し、それらを語幹の構造を基準に3つの類に分けている。その分類基準は明記されていないが、二類〔語幹末母音が長音であるもの〕(e.g. *puija* 「寒い」、*zooho* 「白い」など)、三類〔語幹末が二重子音であるもの〕(e.g. *guffa* 「重い」など)、一類〔その他〕(e.g. *janija* 「汚い」、*pusoho* 「広い」など)ということであるように思われる。また、一類と二類はa、bの2つにそれぞれ下位分類されており、それらは活用語尾の母音が/a/をとる場合a類、/o/をとる場合b類、といった分類基準のようである。しかし、同研究で示された黒島方言の形容詞の活用は、これらすべ

ての類において完全に共通しており、この分類の目的は不明である。本稿においても、黒島方言の形容詞の下位分類を行うが、同研究の基準とは異なる基準を用いる。したがって、本稿の分類と山口（ibid.）の分類の整合性は低い。このため、以後、この山口（ibid.）による分類については触れない。ちなみに、次に述べる平山他（1967）が指摘した「k語幹」についての言及は同研究にはまったくない。

一方、平山他（1967: 179-180）では、「黒島方言の形容詞は「さあり」系<sup>4)</sup>の構成を示し、s語幹に対応する語幹末尾はhである。また連用形に限ってk語幹が現れることが特色である」と述べられ、「高い」という意味の語を例にとって活用が示してある。ここで言及されている「k語幹」は、本稿で扱う接辞kuと同一のものであるものと思われる。ここでは、「da’Nda’N takakudu naru(だんだん高くなる)」という例文がひとつだけ挙げてある。

さて、これらの先行研究を踏まえ、本稿の研究が課題としたのは、①山口（2004）は「k語幹」についてまったく言及していないが、実際に「k語幹」に相当するものは黒島方言に確認されるのか、また、②「高い」以外の語が平山他（1967）の述べる「k語幹」をとる場合、どのようにふるまうのか、という2点である。換言すると、先行研究の問題点としては、山口（ibid.）は「k語幹」に関する記述がないこと、平山他（ibid.）は「高い」しか例がなかったこと、ということになる。このような背景のもと、本稿では項目数を増やした調査に基づいて分析を行う。

先ほどの2つの課題に関する結論を先取りして述べる。まず①については、「k語幹」に相当する形式は、面接調査においても、自然談話においても確認された。また、②の問いに対しては、「k語幹」をとる際のふるまいが語によって異なり、形容詞はそのふるまいの違いによって2つのサブグループに分類される、ということがわかった。したがって、これらの点に関して、先行研究の見落としていた点を本研究は埋めることになる。次節以降で、本研究の分析結果を示す。

#### 4. 接辞kuに対するふるまいの差異による形容詞の分類

本節では、接辞ku<sup>5)</sup>に対するふるまいの違いによって、形容詞が2つのサブグループに分類されることを示すが、先に4.1において、両グループのふるまいの違いが表面化しない場合を確認し、その後に4.2においてグループ間の違いを示す。なお、本稿のデータは、2009年から2013年の間に筆者のフィールドワークによって得られたものである。

本稿では、先に第1節で見た2つのサブグループをそれぞれ、グループAとグループBとし、グループAはguffa（「重い」）という語を、グループBはgumaha（「小さい」）とい

う語を例にとって、以降、説明をしていく。

#### 4.1.両グループのふるまいの違いがあらわれない場合

まず、いったん、両グループの差異が表面化しない例を確認しておく。以下に示すとおり、両グループが示すふるまいは、常に異なるわけではない。

- (1) A. *unu isi=a<sup>6)</sup> guffa-ta*

この 石=TOP 重い-PST

この石は重かった

- B. *unu isi=a gumaha-ta*

この 石=TOP 小さい-PST

この石は小さかった

- (2) A. *unu isi=a guffa naan*

この 石=TOP 重い NEG.COP

この石は重くない

- B. *unu isi=a gumaha naan*

この 石=TOP 小さい NEG.COP

この石は小さくない

このように、両グループの差異が表面化しない場合は観察される。下の表4にまとめておく。

表4 両グループの差異が表面化しない場合

グループA guffa	グループB gumaha
guffa (重い)	gumaha (小さい)
guftata (重かった)	gumahata (小さかった)
guffa naan (重くない)	gumaha naan (小さくない)
guftaka (重ければ)	gumahaka (小さければ)

#### 4.2.両グループのふるまいが異なる場合

次に、接辞 *ku* を付して、両グループの差異が出る場合を確認していく。グループ A では、*guffa/guffaku* のように、基本形にそのまま *ku* を付す。それに対し、グループ B では、*gumaha/gumaku* のように、基本形から *ha* を落としたうえで *ku* を付すと、文法的である。

- (3) A. *unu isi=a guffa-ku=du ar-ta*  
この 石=TOP 重い-ku=FOC COP-PST  
この石は重かった
- B. *unu isi=a guma-ku=du ar-ta (\*gumahaku)*  
この 石=TOP 小さい-ku=FOC COP-PST  
この石は小さかった
- (4) A. *unu isi=a guffa-ku naan*  
この 石=TOP 重い-ku NEG.COP  
この石は重くない
- B. *unu isi=a guma-ku naan (\*gumahaku)*  
この 石=TOP 小さい-ku NEG.COP  
この石は小さくない
- (5) A. *unu isi=a guffa-ku nar-ta*  
この 石=TOP 重い-ku なる-PST  
この石は重くなった
- B. *unu isi=a guma-ku nar-ta (\*gumahaku)*  
この 石=TOP 小さい-ku なる-PST  
この石は小さくなつた

このように両グループ間で明らかに形態的なふるまいの差が見られるが、これはいずれかが特殊で散発的である、といった性質のものではない。今のところ約 50 の語について確認したが、数的な偏りはない。以下、表 5 と表 6 にそれぞれ、グループ A、B の語を、接辞 *ku* を付したかたちと共に挙げる。

表5 グループAの語

重い	guffa	guffaku
うるさい	miffa	miffaku
きたない	janija	janijaku
寒い	piija	piijaku
うれしい	sanija	sanijaku
軽い	harra	harraku
ひもじい	jaasa	jaasaku
うるさい	hasamasa	hasamasaku
うるさい	jagamasa	jagamasaku
難しい	musukasa	musukasaku
遠い	tuusa	tuusaku
さみしい	hamaarasa	hamaarasaku
かわいい	hanasa	hanasaku
固い	koosa	koosaku
薄い	pissa	pissaku
悪い	wassa	wassaku
易しい	jassa	jassaku
おもしろい	umussa	umussaku
安い	jassa	jassaku
忙しい	isugassa	isugassaku
眠い	nihuta	nihutaku
暑い	acca	accaku
かゆい	bjuuwa	bjuuwaku

表6 グループBの語

小さい	gumaha	gumaku
若い	bahaha	bahaku
悪い	janaha	janaku
速い	paaha	paaku
多い	uraha	uraku
少ない	isikaha	isikaku
近い	sikaha	sikaku
おいしい	maaha	maaku
幼い	sinaha	sinaku
高い	takaha	takaku
長い	nagaha	naaku/nagaku
低い	pisaha	pisaku
深い	hukaha	hukaku
浅い	asaha	asaku
狭い	sibaha	sibaku
赤い	akaha	akaku
青い	auha	auku
貧しい	geeraha	geeraku
暗い	baaha	baaku
臭い	zaaha	zaaku
からい	karaha	karaku
やわらかい	jaaraha	jaaraku
にがい	ngehe <sup>7)</sup>	ngeku

上の表5、6に示したとおり、両グループの間に数的な偏りはないと言える。また、Dixon (2004) による意味的な分類も行ったが、特に意味的な偏りもなかった<sup>8)</sup>。

以上、本節では、黒島方言の形容詞は *ku* という接辞を付した際に異なるふるまいを見せる2つのサブグループに分けられることを示した。また、グループAの語は、接辞 *ku* を付す際に基本形にそのまま付すが、グループBの場合、*ha* を落としたかたちに *ku* を付すと、文法的になる、ということも示した。次節では、このサブグループが形容詞をめぐる他の現象を説明する際にも必要であることを示す。

## 5. そのほかの現象における形容詞のサブグループ

本節では、前節で述べた2つのサブグループが、接辞 *ku* をめぐるふるまいに関してのみ有用なものであるというわけではなく、他の現象の説明にも有効であるということを示す。具体的には、2つの現象をとりあげる。1つ目は複合（5.1.）で、もう1つは重複（5.2.）である。

### 5.1. 複合

黒島方言においては、形容詞語根と名詞を複合させることができる。この複合を起こす際に、前節で述べたサブグループ間においてふるまいが異なる。グループごとに確認する。

まず、グループAの語では、基本形のまま複合する。つまり、「重い石」（字義通りに日本語訳すると「重石」）という意味の複合語を形成する場合は、*guffa+isi* となる<sup>9)</sup>。この際、*\*guf+isi* や*\*guff+isi* のようにはならない。

これに対し、グループBの語は異なるふるまいを示す。すなわち、基本形ではなく、基本形から *ha* を落としたかたちと名詞が複合を起こすのである。つまり、「小さい石」（字義通りに日本語訳すると「小石」）を例にとると、*guma+isi* という複合語が形成される、ということである<sup>10)</sup>。

以上示したように、複合語を形成する際にも両グループ間にはふるまいの違いが見られる。しかも、その違いは接辞 *ku* に対するふるまいの場合と同じであり、グループAの場合は基本形のまま複合語化し、グループBの場合は基本形から *ha* を落としたかたちで複合語化するのである。

### 5.2. 重複

続いて、重複について確認する。黒島方言の形容詞語根は重複して、そのうえで属格格助詞をとり、名詞句の修飾部に入ることができる<sup>11)</sup>。意味としては、程度の高さを表すことが典型であるようである。この際にも両グループ間でふるまいが異なる。それぞれ確認していく。

まず、グループAの語においては、重複の場合も基本形を重ねる。したがって、以下の例のようになる。

- (6) *guffa+guffa=nu isi*

重い+重い=GEN 石

重い石

この場合、*\*gufagufa*、*\*gufguf*、*\*guguffa*などにはならず、基本形がすべて重複される格好である。

これに対し、グループBの場合は、やはり *ha* を落としたかたちが重複される。以下に例を示す。

(7) *guma+guma=nu an*

小さい+小さい 蟻

小さい蟻

この際、*\*gumahagumaha*とはならない。したがって、重複の場合も、複合の場合と同様に、グループAにおいては基本形を利用し、また、グループBにおいては基本形から *ha* を落としたかたちを利用する。

### 5.3.サブグループに分かれる要因

ここまで、複合と重複を観察した。そのことによって、本稿の前半で述べた形容詞のサブグループは、決して接辞 *ku* に関するふるまいにのみ関係するわけではなく、種々の現象にわたって重要な区別である、ということが明確になった。

ここで、接辞 *ku*、および、複合、重複に関する両グループのふるまいを表7にまとめておく。

表7 両グループのふるまいの違い

	グループA	グループB
基本形	<i>guffa</i>	<i>gumaha</i>
-ku	<i>guffa-ku</i>	<i>guma-ku</i>
複合	<i>guffa+isi</i>	<i>guma+isi</i>
重複	<i>guffa+guffa</i>	<i>guma+guma</i>

表7にまとめた、以上の現象を考慮に入れると、両グループ間の形態的差異が説明できる。グループAの語は、基本形より小さいかたちで生起することがない。これに対し、グループBの語は基本形から *ha* を落としたかたちで生起することが可能である。つまり、グループBのほうは接尾辞をとりだすことが可能であるのに対し、グループAのほうは、接尾辞の分析が不可能、という状況である。換言すると、それぞれの形態的操作の際の両グループのふるまいの違いは、この接尾辞の分析可能性の違いに起因しているのであり、

グループ B の *gumaha* はより細かく、*guma-ha* と分析されるべきである、ということである。

以上、ここまで、黒島方言の形容詞は形態的に 2 つのサブグループに分けられることを、*ku* の添加、複合、重複のそれぞれの場合のふるまいの違いの観察を通して、確認した。そして、そのサブグループを分ける要因を語根と接尾辞の分析可能性の違いとした。

## 6.他の琉球諸語における *ku* に対する形容詞のふるまい

本節では、他の八重山方言や琉球諸語でもこの接辞 *ku* に対するふるまいの違いが見られる可能性を示す。筆者は、黒島以外の八重山地方においては調査を行っていないため、本節の資料は平山他（1967）から得たものを使用する<sup>12)</sup>。

平山他（1967）では、八重山地方の方言がいくつか取り上げられ、簡単な形容詞の形態論が示されている。そのなかで、3 節で述べたように、黒島方言の形容詞については、「k 語幹」の存在が述べられていた。

そこで、他の方言で「k 語幹」についての言及があるかどうか確認したところ、石垣島東部の大浜方言において「k 語幹」についての言及が見られた。それによると、「大浜方言の形容詞の構成は、(中略) 「さあり」系であって、s 語幹による構造を示す。活用体系もほとんど石垣方言の様相と同じであって、その他の八重山群島の諸方言の多くと同一の体系である (ただし、連用形に k 語幹も観察された。)」(平山 1967: 169) とされている。そして、具体例を見ると、「takaku naru'N (高くなる)」と記してある。この状況は、黒島方言と同じように見える。

ここで、問題となるのは、同書（平山他（1967））の語彙集（大浜方言の箇所）に含まれている、aQca'N 「暑い」 や、jaQsa'N 「易しい」 などの語に *ku* が後接した場合にどのようになるのか、ということである。また、複合や重複が起こった際にもどのようになるか興味深いが、今のところ資料がないため、なんとも言えない。今後、詳細な大浜方言の形容詞の形態論が書かれたとしたら、本稿の研究との異同が興味深いものとなる。

また、鹿児島県大島郡喜界町上嘉鉄でフィールドワークを行っている白田理人氏（京都大学/日本学術振興会）によると、上嘉鉄方言（北琉球語）においても黒島方言と似たような現象が確認されるようである（私信）。つまり、*sura-sa* 「きれいだ」、*minda-sa* 「珍しい、楽しい」のように、末尾が *Vsa*<sup>13)</sup> となる語の場合は、*sura-ku*、*minda-siku* というように -ku/-siku を付すことができるのに対し、*hissa* 「薄い」 のように *Vssa* となる語の場合は、語幹の交替が起こり *hisu-ku* となる、とのことであった。また、この *hissa* に関しては、複合の際にも

*hisu+habii*（薄い十紙）のように、*ku* を後接させるのと同じ語幹を用いるそうであり、この現象は明らかに黒島方言における現象と類似性が高い。

さらに、鹿児島県大島郡宇検村湯湾でフィールドワークを行っている新永悠人氏（東京外国語大学/日本学術振興会）によると、湯湾方言（北琉球語）にもやはり *ku* という接辞をとる際に特異なふるまいを見せる語があるそうである（私信）。例えば、*kjurasa*「きれいだ」という語は *kjuraku* となり、これが一般的であるのに対し、*umussja*「おもしろい」という語は *umussjaku* となるようである。

以上のように、他の琉球諸語においても本研究で取り上げたものと同様の現象が確認されるようあることを示した。本稿でとりあげた *ku* という接辞にまつわる現象は、これまであまり指摘がなされてこなかったようである。この点に関しては、本研究は琉球諸語における形容詞の形態論に対して貢献するものと言えよう。また、服部（1932）やかりまた（2000）などのように、日本語と琉球語の関係及び、琉球語内部での関係について検討する際には形容詞に関する研究が重要であるという指摘もあるため、今後、各地の調査が進んだ際には、琉球語や日琉語の歴史的発達に関しても貢献できる可能性がある。

## 7.まとめと今後の課題

以上、本稿で述べたことをまとめると、次の3点になる。

- (8) 黒島方言の形容詞は、接尾辞の分析可能性の違いにより、2つのサブグループに分けられる。特に、*ku* という接辞を付した際にその違いが顕著にあらわれ、グループAの *guffa* という語の場合、*ku* を付したとき *guffa-ku* となるのに対し、グループBの *gumaha* という語の場合、*guma-ku* というかたちになる（4節）。
- (9) 上記の形容詞のサブグループは *ku* に続く場合のみに有効であるわけではない。複合や重複の際にも同じふるまいを示す（5節）。
- (10) 琉球諸語において形容詞が *ku* に続く場合に特異なふるまいを見せることを体系的に示したのは本研究が（おそらく）初めてである。他の方言の記述や現象を見ると、類似した現象が他方言にも十分に見られそうである。この点は琉球諸語の形容詞形態論に貢献すると言える（6節）。

ただし、残る課題も多い。ひとつは、例外の存在についてである。*uboho*「大きい」という語は *ku* を後接させた場合、*ubuku/ubohoku* といういずれのかたちもとりうる。このような現象は、*piirakeheku/piirakeku*「涼しい」と *pusohoku/pusoku*「広い」でも観察された。これらの例では接尾辞 *ha* と形容詞語幹の末尾母音が母音同化を起こしており、そのために、

語幹と接尾辞の切れ目がわかりづらくなっているのかもしれない。このような現象も、語幹と接尾辞の分析可能性という点などから、まだまだ検討の余地がある。また、グループA、グループB間の関係についても本稿では言及できなかった。今後、調査を進めたい。また、今回焦点を当てた、*ku* という接辞の持つ意味に関しては、注6でも述べたとおり、はつきりわかつておらず、今後、テキストを収集し、考察する必要があろう。

### 【注】

- 1) 本研究は、黒島の方々のご協力がなければ不可能でした。特に、宮喜清さん、宮良ミヨさん、船道賢範さん、宮良当成さん、又吉智永さん、宮良哲行さん、黒島研究所の方々には大変お世話になりました。ここには名前を挙げない方々にも助けていただきました。深く感謝いたします。また、本稿の内容は第93回日本方言研究会研究発表会における口頭発表に大幅に加筆したものである。その場でコメントをくださった方々にもお礼申し上げます。なお、本研究は日本学術振興会特別研究員奨励費『南琉球八重山黒島方言の総合的記述研究』の支援を受けている。
- 2) 図1の地図はトマ・ペラール氏の作成による。
- 3) 伊古と宮里はもともとの住民が全員よそへ移り住んでしまっており、現在の住民は島外からの移住者である。
- 4) 琉球諸語の「形容詞」は伝統的に「さあり」系と「くあり」系に区別されてきた。「高い」を例にとると、その「名詞形」である「高さ」に「あり」が接続した「高さあり」を起源とする「さあり系」と、「連用形」に「あり」が接続した「高くあり」を起源とする「くあり系」の2種類に分類される、とされている。(仲宗根 1961: 41-43)。これらは地理的な変異であるとみなされている。すなわち、「サアリ系は、奄美諸島から沖縄本島・宮古多良間島・八重山諸島にひろがる。クアリ系は、宮古本島と伊良部島にある」(仲宗根 *ibid.*)とされている。
- 5) 当該方言の形容詞文には、*ku* が付される場合と付されない場合があり、それらはほぼ同義である。

A.unu      *isi=a*      *guffa-ku=du*      *ar-ta*      (*ku* あり)

この      石=TOP  重い-*ku*=FOC      COP-PST

この石は重かった

B.*unu isi=a guffa=du ar-ta* (ku なし)  
この 石=TOP 重い=FOC COP-PST  
この石は重かった

C.*unu isi=a guma-ku=du ar-ta* (ku あり)  
この 石=TOP 小さい-ku=FOC COP-PST  
この石は小さかった

D.*unu isi=a guma-ku=du ar-ta* (ku なし)  
この 石=TOP 小さい-ku=FOC COP-PST  
この石は小さかった

この接辞 *ku* が付された場合の機能的・意味的な特徴ははつきりしていない。なにかとなにかを比べるようなときに *ku* が用いられることが多いようである。ただし、そのような場合であっても *ku* が必須であるわけではない。

E.*unu isi=a hanu isi=kin=a guffa-ku=du ar-ta*  
この 石=TOP あの 石=より=TOP 重い-ku=FOC COP-PST  
この石はあの石より重かった

F.*unu isi=a hanu isi=kin=a guma-ku=du ar-ta*  
この 石=TOP あの 石=より=TOP 小さい-ku=FOC COP-PST  
この石はあの石より小さかった

また、接辞 *ku* が付されたかたちと（付されない）基本形とはほぼ同じ環境に生起可能である。唯一異なるのは、基本形はそのままで連体修飾が可能であるのに対し、*ku* を付した場合は、*guffa-ku-ru* のように連体修飾接辞をさらに付す必要がある、という点においてである。これ以外は、ほぼ同じ環境で生起し、*unu isi=a guffa-ku* や *unu isi=a guma-ku* のように、接辞 *ku* で文を終えることも可能である。このように、文を終止することも可能であるため、平山他（1967: 179）の「連用形に限って k 語幹が現れる」という記述も修正されるべきである。さらに例を示すと、この接辞 *ku* は、*unu isi=a guffa-ku-ta*（「この石は重かった」）のように、過去の接辞をとることもできるなど、通常の形容詞と同じ活用を示す。

6) *isi=a*（石=TOP）は、形態音韻規則により [ieeee] と発音される。

- 7) *ngehe* の末尾は *he* となっているが、これは母音同化によるものと考えられる。すなわち *ngehe* は基底では//*nge-ha*//であり、*ha* の母音が同化を起こしているのであろう。ちなみに、7 節で述べる *uboho* も基底では//*ubu-ha*//であり、母音同化が起こっている。
- 8) Dixon (2004) は、形容詞的な意味を physical property、human propensity、difficulty、value、position、age、speed、quantification、dimension、colour、similarity、qualification、cardinal number の 13 種に分類したが、本論による 2 グループは、この分類とは相関しない。なお、色彩語彙で形容詞であらわれるのは *auha* 「青い」と *akaha* 「赤い」のみであり、色彩の基本語彙である白と黒に関しては、山口 (2004) に *zooho* 「白い」が挙げられてはいるものの、実際には名詞 (*zoosso* 「白」、*vooffo* 「黒」) がもっぱら用いられる。
- 9) ただし、グループ A の複合語に明確な例外が 1 例ある。それは (火山の噴火などで生じた)「軽石」という意味の語である/*haraisi*/である。「軽い」という意味の語の基本形は/*harra*/であるが、この「軽石」という意味の複合語の場合、/*harraisi*/となることはない。ただし、このような例はほかになく、語彙化の度合いも高いため、今回は例外として考えた。また、形容詞を前部要素に持つ複合語を考える際、注意しなければならないのは、基本形はそのまま名詞句の修飾部に入ることができるので、それとの区別がつきにくい、という点である。ただし、*guffa+isi* というように複合語化した場合、このまとまりで 1 つのアクセント単位となるため、*guffa* の部分で下降しない。これに対し、{*guffa* {*isi*}} というように名詞句の構造をとった場合、*guffa* の部分での下降が認められる。したがって、アクセントを考慮に入れれば、/*guffaisi*/という音列を複合語と認めることが可能である。
- 10) ちなみに、(上の注 9 でグループ A に関して述べたのと同じく、) グループ B の語も基本形で複合を起こすことが可能である。つまり、*gumaha+isi* となり、1 つのアクセント単位となる場合である。しかし、ここで重要なのは、グループ A とグループ B の複合語化する際のふるまいが異なり、グループ B に関しては *guma+isi* が可能である、ということである。
- 11) 形容詞語根の重複の際、1 つ目の語根の末尾モーラが 1 モーラ分伸びることがあるが、これは、任意のようである。つまり、「小さい」を重複した場合、/*gumaaguma*/となることもあるが、/*gumaguma*/が許容されないわけではなく、こちらも文法的である。また、形容詞語根の重複形は、属格をとつて名詞句の修飾部に入るのみならず、副詞としても機能する (*guma+guma nar-ta* 「小さくなつた」)。ちなみに、重複しない形容詞の基本形は属格をとることはできない (\**gumaha=nu isi*)。
- 12) ちなみに、八重山地方の方言の文法を記述した Lawrence (2012) (鳩間方言の文法スケッチ)、Aso (2010) (波照間方言の文法スケッチ)、宮良 (1995) (石垣方言の文法書)

のいずれにも、接辞 *ku* に関連のありそうな形式の記述はなかった。そのような形式が実際にはないのかどうか、確認はこれからである。

13) V は母音をあらわす。

### 【参考文献】

沖縄県八重山支庁 (2012) 『八重山要覧』

([http://www.pref.okinawa.jp/site/somu/yaeyama/shinko/documents/yaeyamayouran/yaeyama\\_youran.html](http://www.pref.okinawa.jp/site/somu/yaeyama/shinko/documents/yaeyamayouran/yaeyama_youran.html) : 2013 年 10 月 28 日アクセス)

かりまたしげひさ (2000) 「多良間方言の系譜—— 多良間方言を歴史方言学的観点からみる——」高良倉吉 (編) 『沖縄県多良間島における伝統的社会システムの実態と変容に関する総合的研究』 科学研究費研究成果報告書, pp. 27-37.

仲宗根政善 (1961) 「琉球方言概説」東条操監修『方言学講座 第四巻 九州・琉球方言』 東京堂, pp.20-43

服部四郎 (1932) 「「琉球語」と「國語」との音韻法則 (一)」『方言』2 (7) 春陽堂, pp.22-37.

平山輝男・大島一郎・中本正智 (1967) 『琉球先島方言の総合的研究』明治書院

宮良信詳 (1995) 『南琉球 八重山石垣方言の文法』 くろしお出版

山口栄臣 (2004) 「八重山郡竹富町黒島方言の活用」内間直仁 (代表研究者) 『沖縄県宮古・八重山方言の調査研究—宮古郡下地町来間・八重山郡竹富町黒島方言を中心に— (課題番号 14510450) 平成 14 年～平成 15 年度科学研究費補助金 研究成果報告書』, pp. 59-74.

山田実 (1983) 『琉球語形容詞の形態論的構造』 桜楓社

ローレンス・ウェイン (2000) 「八重山方言の区画について」 石垣繁 (編) 『宮良當壯記念論集』 ひるぎ社, pp. 547-559.

Aso, Reiko. (2010) Hateruma. In Shimoji, Michinori and Thomas Pellard. (eds.) *An Introduction to Ryukyuan Languages*. Tokyo: Research Institute for Languages and Cultures of Asia and Africa, pp. 189-227.

Dixon, R. M. W. (2004) Adjective Classes in Typological Perspective. In Dixon, R. M. W. and Alexandra Y. Aikhenvald (eds.) *Adjective Classes: A Cross-Linguistic Typology*. Oxford: Oxford University Press, pp. 1-49.

Lawrence, P. Wayne. (2012) Southern Ryukyuan. In Tranter, Nicolas. (ed.) *The Languages of Japan and Korea*. London and New York: Routledge, pp. 381-411.

【略号一覧】

COP	コピュラ	FOC	焦点	NEG	否定
PST	過去	TOP	主題		